



サウジ原油調整金、3カ月連続上昇 9月積み自主減産で

サウジアラビア国営石油のサウジアラムコは、9月積みのアジア向け原油の調整金を3カ月連続で引き上げる。代表油種の「アラビアンライト」は8月積みに比べ0.30ドル高い1バレルあたり3.50ドルを割り増しして2022年12月以来の高さにする。7月から実施している自主減産で国際的な原油価格が上昇していることを映した。

日本の石油会社がサウジと結ぶ長期契約の価格は、ドバイ原油とオマーン原油の月間平均価格に油種ごとの調整金を加減して決める。9月積みは軽質の「エキストラライト」を据え置いたのを除き、4油種で調整金を引き上げる。

サウジアラビアは3日、7月に始めた日量100万バレルの自主減産を9月も実施すると決めた。ロシアも同日に9月の原油輸出を同30万バレル減らすと打ち出した。産油国でつくる石油輸出国機構（OPEC）プラスの一部の国は5月から同116万バレルの減産を実施しており、これらを合わせた減産量は世界需要の約2.5%にのぼる。

供給減を受け、国際的な原油価格は上昇基調だ。米先物指標のWTI（ウエスト・テキサス・インターミディエート）は先週まで6週連続で上昇して1バレル80ドルを超え、3カ月半ぶりの高値圏で推移する。

世界第2の原油消費国である中国経済の回復の足取りは鈍いものの、市場では財政出動による景気刺激策への期待も高まっており「年末に1バレル90ドルに到達する局面もある」（日本総合研究所の松田健太郎副主任研究員）との見立ても出ている。

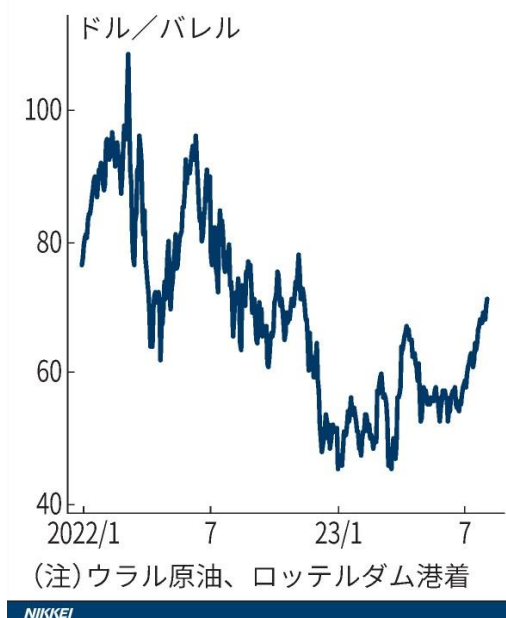


ロシア原油9カ月ぶり高値 減産・インド向け需要堅調で

ロシア産原油が一段と値上がりしている。主力油種は一時9カ月ぶりの高値をつけ、西側諸国が経済制裁で設定する価格上限を超えたもようだ。

制裁に加わらないインドや中国による需要が根強い。ロシアによる自主的な減産や輸出抑制で供給も減り、価格を押し上げた。

ロシア産原油は値上がりが鮮明



金融情報会社リフィニティブによると、ロシア産の主力油種「ウラル」のロッテルダム港着価格（運賃・保険料込み）は前週末4日に1バレル71ドル台をつけた。前の日から2%上昇し、2022年11月以来の高値となった。

主要7カ国（G7）は22年12月にロシア産原油の取引価格に「上限」を科す制裁を始めた。1バレル60ドル（運賃・保険料除く）を超えた取引には、海上輸送に欠かせない保険の契約ができないようにした。

ロッテルダム港着の原油の運賃や保険料は10ドル程度とされる。足元の契約価格は上限を上回っているとみられる。

国際指標の北海ブレント原油先物に対する割引（ディスカウント）幅も1～2月は32ドルだったが、足元では16ドル前後。ロシアがウクライナへの侵攻を始めた直後の22年2月下旬以来の水準まで縮まった。アジア向けの油種「エスポ」も4日に78ドル台と、2月以来の高値をつけた。



背景にあるのはインドや中国の旺盛な需要だ。リフィニティブでロシアからの海上輸送先を分析したところ、23年1~7月にインド向けは全体の3割強と最多で、中国の2割強が続いた。

ウクライナ侵攻前の21年には欧州向けの輸出が多くを占め、インドは数%、中国も15%程度にとどまっていた。

供給が減ることも一段と意識されている。ロシアは8月に日量50万バレルの自主減産を実施し、9月も同30万バレルの輸出を減らすと決めた。

価格上昇に弾みがつけば制裁効果をそぎかねない。市場では「米国をはじめ西側諸国は今後、インドなどの企業も対象に加える2次制裁に踏み切る可能性がある」（エネルギー・金属鉱物資源機構=JOGMECの原田大輔調査課長）との見方が出ている。



ガソリン180円超え、12週連続上昇 原油高を反映

資源エネルギー庁が9日発表したレギュラーガソリンの店頭価格（全国平均、7日時点）は前週と比べ3.6円高の1リットル180.3円だった。値上がりは12週連続となった。原油価格の高止まりがガソリン価格の押し上げにつながった。

原料の原油価格は高い水準で推移している。原油のアジア市場の指標となる中東産ドバイ原油は、7日時点で1バレル87.1ドル前後と前週比で8%程度高い。サウジアラビアが9月も減産を続けると伝わったことで、原油の供給不足が意識された。

政府はインフレ対策で22年1月から石油元売りなどに補助金を支給している。9月末の終了に向けて、6月から補助率を縮小している。3日から9日までの補助率は前週から据え置きのため、主に原油価格の変動分がガソリン価格を押し上げた。



資源エネルギー庁によると、14日時点のガソリン価格は補助金がなければ195.5円になる想定だ。抑制の目標とする168円との差の25円以下の部分に補助率40%を乗じた10円と、25円を超えた部分に補助率80%を乗じた2円を合計した12円が10日から一週間の補助金となる。

3～9日分の補助金から2.9円増えるものの、原油高を給油所がコスト転嫁しきれていないことから、来週のガソリン価格も小幅な値上がりが予想される。

出光興産の尾沼温隆・執行役員経理財務部長は8日のオンライン会見で「原油価格の高騰等によるガソリン価格の値上がりは消費者にとって負担になる」と話した。



ENEOS、バイオ由来のペットボトル原料 サントリー向け

ENEOSホールディングスは7日、2023年中にバイオマス由来のペットボトル原料の生産を始めると発表した。サントリーホールディングス向けに供給する。23年の生産量はペットボトル約3500万本分に相当する。原油由来の原料の消費量を減らし、石油化学事業の環境負荷を抑える。

生産するのは「パラキシレン」。バイオ由来のパラキシレンを商用規模で生産するのは世界で初めてという。水島製油所（岡山県倉敷市）の既存設備でつくる。供給網の管理には三菱商事が協力する。原料は廃食油由来のナフサ（粗製ガソリン）を使い、フィンランドの石油精製大手ネステから調達する。

生産したパラキシレンをもとに化学メーカーがペットボトル用の樹脂をつくる。使用後のリサイクルも可能だ。パラキシレンはポリエステル繊維の原料にもなり、ENEOSは将来衣料品向けにも供給したい考えだ。海外への輸出も視野に入れる。

パラキシレン1トンあたり二酸化炭素（CO2）排出を約2.5トン減らせる。生産工程ではバイオ由来と原油由来のナフサを混ぜる。バイオ由来の原料の使用量に応じ、CO2の削減効果などを一部の製品に割り当てる。



週間原油コストの推移

	期間	原油相場		為替(▲は円高)		円建て原油コスト	
		ドル/バレル	前週比	ドル/円	前週比	円/ℓ	前週比
火曜日～ 月曜日	6/27～7/3	74.76	▲1.02	145.27	1.77	68.30	▲0.09
	7/4～7/10	77.02	2.26	145.05	▲0.22	70.26	1.96
	7/11～7/17	80.14	3.12	140.52	▲4.53	70.83	0.57
	7/18～7/24	80.89	0.75	140.91	0.39	71.69	0.86
	7/25～7/31	84.73	3.84	141.71	0.80	75.52	3.83
	8/1～8/7	86.09	1.36	143.75	2.04	77.83	2.31
水曜日～ 火曜日	6/28～7/4	74.73	▲0.78	145.46	1.68	68.37	0.09
	7/5～7/11	77.30	2.57	144.43	▲1.03	70.22	1.85
	7/12～7/18	80.46	3.16	139.87	▲4.56	70.78	0.56
	7/19～7/25	81.57	1.11	141.45	1.58	72.57	1.79
	7/26～8/1	85.04	3.47	141.88	0.43	75.88	3.31
	8/2～8/8	86.19	1.15	143.87	1.99	77.99	2.11

※原油はドバイ、オマーン平均、為替レートは三菱UFJ銀行のTTSLレート